

科目名	日本語学習アドバイジング			ナンバリング	JPN142	授業形態	講義
対象学年	2	開講時期	後期	科目分類	選択	単位数	2 単位
代表教員	玉懸元	担当教員					

授業の概要	日本語を母語としない学習者が日本語を身に付ける過程では、日本語の学び方に関して、あるいは日本語を取り巻く日本文化に関して、さまざまな悩みをかかえることになる。日本語教員は、ただ教室で日本語を教えるばかりではなく、学習者のそうした悩みに対して適切なアドバイスができなければならない。 この授業では「異文化交流」「第二言語習得」「日本語学習者の学習過程」について学ぶ。それによって、日本語学習者に対するアドバイスを行う際の基礎となる知見を習得することがこの授業の目的である。 (※)日本語教員を目指す人はもちろん、「日本文化と外国文化のちがい」「日本人らしさとは何か」「外国人との付き合い方」「効率的な外国語の学び方」といったトピックに関心ある人の受講も期待している。						
到達目標	(1) 異文化交流に関する基本的概念―「文化」「自文化中心主義」「U字曲線」等―について、説明できる。 (2) 異文化交流において生ずる問題について、具体的事例に則して考察し、その解決策を提示することができる。 (3) 第二言語習得に関する基本概念―「対照分析」「誤用分析」「中間言語」「インプットとアウトプット」等―について、説明できる。 (4) 現在の日本語教育現場における学習者の学習過程について、説明することができる。 (5) (3)(4)を踏まえ、日本語教育の現状について批判的かつ発展的に考察を展開することができる。						
学習のアドバイス (勉強方法、履修に必要な 予備知識など)	・「日本語教育文法」を履修してあることが望ましい。 ・授業時間中に受講生同士で議論する時間を設ける。積極的に意見を交わしてもらいたい。 ・授業時間中には、ここに示した参考書以外にも、授業内容の理解や発展的考察に役立つ文献等を多数紹介する。受講者それぞれ、自学に活用してほしい。						
ディプロマポリシーとの 関連	【教養学部 地域教養学科のディプロマポリシー】						
		1. 専攻分野それぞれの基礎的な知識を確実に身につけ、それらを活用して基本的な問題を解決することができる。					
		2. 専攻分野それぞれの基本的スキルを、地域社会に貢献するために活用することができる。					
	○	3. 自分の意見や考えを説明し、他者と協調して積極的にコミュニケーションをとることができる。					
	○	4. 広い視野と論理的・批判的思考力を身につけ、困難な課題や予測不能な事態に直面しても適切に対処することができる。					
	○	5. 社会の一員としての自覚を持ち、社会生活の場において、地域を支える社会人・職業人としてふさわし関心・意欲・態度を示すことができる。					

標準的な到達レベル(合格ライン)の目安	理想的な到達レベルの目安
(1) 授業で課されるすべての課題に真摯に取り組み、提出すべきものを提出している。 (2) 異文化交流に関する基本的概念―「文化」「自文化中心主義」「U字曲線」等―について、説明できる。 (3) 第二言語習得に関する基本概念―「対照分析」「誤用分析」「中間言語」「インプットとアウトプット」等―について、説明できる。 (4) 現在の日本語教育現場における学習者の学習過程について、説明することができる。	(1) 毎回の授業において発言の回数等から意欲・関心が認められ、すべての課題を提出している。 (2) 異文化交流に関する基本的概念―「文化」「自文化中心主義」「U字曲線」等―について説明でき、具体的事例に則して異文化間の問題を考察し、その解決策を提示することができる。 (3) 第二言語習得に関する基本概念―「対照分析」「誤用分析」「中間言語」「インプットとアウトプット」等―について説明できる。 (4) 現在の日本語教育現場における学習者の学習過程について、説明することができる。 (5) (3)(4)を踏まえ、日本語教育の現状について批判的かつ発展的に考察を展開することができる。

成績評価観点 評価方法	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現	その他	評価割合
定期試験(中間・期末試験)							
小テスト・授業内レポート	○	○			○		60%
宿題・授業外レポート	○	○			○		20%
授業態度・授業への参加		○	○	○	○		20%

課題、評価のフィードバック	原則として毎時間、授業の終わりに、当日の授業内容に関連する課題を提出してもらう。授業後、提出された課題から、クラス全体で共有しておくことが有益と考えられるものを選出する。翌週(原則)の授業で、選出しておいた課題を適宜プロジェクター等も活用しながらクラス全体に紹介し、教員のコメントを加える。以上をもって課題に対するフィードバックとする。
---------------	---

	回次	テーマ	授業内容	備考
授業計画	第1回	ガイダンス	この授業全体に関するガイダンス	
	第2回	異文化交流(1) 異文化とは何か	われわれはどのような事態に接したときに「異文化」の存在を感じるのか	
	第3回	異文化交流(2) 常識と非常識	ある文化において「常識」とされる事柄が別の文化では「非常識」とされる	
	第4回	異文化交流(3) 自文化中心主義	文化間で「常識と非常識」が食い違うとき、それについてわれわれはどのように思う傾向があるか	
	第5回	異文化交流(4) 異文化適応のU字曲線	異文化への「違和感」はその後どのように変化するか	
	第6回	異文化交流(5) ケーススタディ・謝罪の異文化	日本文化において「謝罪」が求められるのはどのような場合か	
	第7回	異文化交流(6) ケーススタディ・礼儀と友情の異文化	日本文化において「親しさ(友情)」と「礼儀」とがどのようにかわり合うか	
	第8回	異文化交流(7) ケーススタディ・自己PRの異文化	日本文化において「自己PR」を行う際、その内容にはどのような特徴があるか	
	第9回	異文化交流(8) ケーススタディ・謙遜の異文化	日本文化において「謙遜」することが求められるのはどのような場合か、また、なぜそう求められるのか	
	第10回	第二言語習得理論と日本語学習者の学習過程(1)	第二言語習得における対照分析の役割とは	
	第11回	第二言語習得理論と日本語学習者の学習過程(2)	第二言語習得における誤用分析の役割とは	
	第12回	第二言語習得理論と日本語学習者の学習過程(3)	第二言語習得における中間言語分析の役割とは	
	第13回	第二言語習得理論と日本語学習者の学習過程(4)	第二言語習得における習得順序とは	
	第14回	第二言語習得理論と日本語学習者の学習過程(5)	第二言語習得におけるインプットとアウトプットの役割とは	
	第15回	まとめと試験	第1回～第14回の授業を振り返り、この授業で学んだことをまとめる。また、その理解度を問うための試験を行う。	
	試験	定期試験は行わない。		
授業の進め方		原則として講義形式。文献講読やディスカッションも行う。適宜、授業内で小テスト、授業外で宿題を課す。		
授業外学習の指示		参考書を活用しながら、各回の授業内容について予習・復習を行うこと。 (授業外学習時間： 毎週 180 分)		

教科書	適宜資料を配付する。
参考書	・小道迷子ほか(2010)『日本語教師のための異文化理解とコミュニケーションスキル』三修社 978-4384055726 ・原沢伊都夫(2014)『多文化共生のための異文化コミュニケーション』明石書店 978-4750340647 ・大関浩美・白井恭弘(2010)『日本語を教えるための第二言語習得論入門』くろしお出版 978-4874244807
参考URLなど	適宜授業中に指示する。
その他	